

「地域の論点」

藤岡ゼミを通じた若者のエンパワメント

藤岡ゼミ代表

エデュケーター

音楽祭プロデューサー

藤岡 浩志

私は若者たち（特に、学生たち）の自己肯定感を高める手段として、藤岡ゼミ（学生と社会人の有志による社会教育系の任意団体）を運営しています。

目的は以下の通りです。

少子高齢化やテクノロジーの発展などにより、世界は目まぐるしく変化している。そのような先が不透明な時代において必要とされるのは、常に学び、多種多様な人々と協働して問題を解決する力である。それを向上させるきっかけの一つとして、松本市の社会課題について情報共有を行い、その解決策を考え提案する機会を提供する。

2017年5月に、学生3名、社会人2名でスタートしました（2020年4月1日現在は、学生18名、社会人4名、という構成になっています）。この活動の中で大切にしているのは「アクションにつなげる」ことです。問題意識を共有し、議論するところまでは比較的取り組みやすいのですが、実際にそれをどう形にするか（どうアクションを起こすか）という点については、急にハードルが上がり、動き出せない人の方が多いのではないかと思います。この壁をどう超えるか。これが藤岡ゼミの大きなテーマになっています。

ここで、さらにポイントを挙げておきます。それは「学生たちが一番不利益を被っている問題を扱う」ということです。このような問題であれば自然と当事者意識が生まれ、主体的に関わりやすくなります。つまり、モチベーションが上がるということです。これを踏まえて、最初のテーマとして「松本市におけるバスの遅延」を取り上げ、それに対する解決策を考え、松本市議会に請願・陳情として提出することにしました。

松本市では、バスの遅延に対処するためにバスロケーションシステムとICカードの導入を計画していたのですが、それがいつ形になるのかまでは明らかにされていませんでした。藤岡ゼミでは、この事業を早期実現することが必要と考え、これ

を学生たちの実情や当事者意識あふれる言葉と共に提案することを決定。研究データ（信州大学松本キャンパス大学生生活アンケート 2017）やインタビュー調査を活用して、「多くの学生がバスの遅延で不利益を被っている」という事実を立証した上で提言を行いました。この模様を新聞や SNS などのメディアを通して発信したことにより、世論も大きく動いたように思います（以下のウェブサイトを参照）。

信大生によるバスの利便性向上に関する 2 つの請願・陳情が松本市議会で全会一致で採決

結果的に、この提言は採択され、公共交通に関する政策を前進させることに成功しました。つまり、松本市はバスロケーションシステムと IC カードを具体化することを市民に約束したということです。もう先延ばしにはできないので、数年以内に何らかの形で市民に示す必要があります。もし、学生たちのアクションがなければ、いつ実現されるのか分からない状態とバスの遅延によるストレスフルな生活が延々と続いていたことでしょう。

藤岡ゼミを立ち上げる前に、学生チームの代表者は以下のように話していました。

高校生のときに、本や授業を通して、世界には沢山の問題があることを知った。しかし、問題が大き過ぎて、自分には何もできないのではないかと思った。

これは多くの若者たちの実感ではないかと思います。

無力感。この気持ちが生まれる要因はおそらく彼らの生い立ちの中にあるのではないかと思います。つまり、「自分のアクションによって何かが変わる」という体験があるかどうかで、「自分にもできる」という自己肯定感の度合いが変わってくる、ということです。

先ほどの学生が言うように、世界や日本全体に関する問題は規模が大きいので、一人の力ではどうすることもできません。確かにその通りなのですが、よくよく考えれば、世の中にあふれる問題はそれだけではありません。視点を変えて、自分の周りを見渡してみれば、自分にとって優先度が高い、かつ、自分にも解決できそうな問題があるはず。そこから、まずやってみる。その結果、少しでも自分が暮らす場所が良くなれば、それだけでも素晴らしいことではないでしょうか。

自分の得意なものが活かせる、かつ、規模が小さい問題。このようなものであれば、モチベーションを保ちながら取り組むことができます。また、自分にはないものを持っているメンバーとチームを結成し、そのチームで解決策を考えれば、問題解決のスピードを速めることができます。身近な問題、自分の得意分野、チームによる問題解決。これらを踏まえてアクションを起こし、小さくても良いので成功体験を積む。これにより、自分の中に自信が生まれ、それが新たなアクションにつながっていきます。

もちろん、そのプロセスの中で失敗することもあるでしょう。しかし、それはマイナスなことではなく、むしろ学びです。これは必ず次のアクションやこれからアクションを起こそうとしている若者たちの教科書として機能します。つまり、失敗できる環境も必要だということです。藤岡ゼミでは、社会人チームによるサポートがあるので、「安心して失敗できる、かつ、そこから多くのことを学べる」というのが大きなポイントではないかと思います。

現在、藤岡ゼミはクローズドなシステムを採用しています。社会人メンバーによるリクルートと学生メンバーからの紹介というプロセスを経て、私が総合的に判断して参加を決定しています。なぜこのような方法で運営しているかという点、藤岡ゼミではフロンティアスピリットを持った学生を対象としている、かつ、「主体性」「リーダーシップ」「チームマネジメント」というスキルの向上を重視しているからです。社会課題を解決したいと思っているが、どうすればよいか分からない。そんな状態にある学生たちにスキルと自信を与え、それをさらに高めるためのサポートをする。これが藤岡ゼミの存在理由です。

プロジェクトについては、バスロケーションシステムの運営状況をチェックしながら、改善点があれば随時提案を行う予定です（現在、アプリのユーザビリティについて調査しているところですが、一部の学生から「バスの現在地が把握できるようになったおかげでストレスが減ったのは嬉しいが、まだまだ不具合や操作性の低さが目立つので、すぐ改善してほしい」という声が挙がっています）。他にも、松本市受動喫煙防止関連条例案に対する提案や若者の政治参加を促進するためのキャンペーン活動を実施しました。これらについても、動向を注視しながら、必要に応じてアクションを起こしたいと思っています。

公共交通の問題に対するアクションがきっかけとなり、それを運営していた学生メンバーを中心として信州大学地域参画プロジェクト CHANGE という学生団体が生

まれました。受動喫煙と政治参加に関するアクションについては、「実施主体は CHANGE、藤岡ゼミはそのバックアップ（主に戦略立案）」という形で連携システムを構築しました（学生 6 名が藤岡ゼミと CHANGE、両方に所属することで、情報共有や意見交換の精度を高めています）。

今後は、公共交通、受動喫煙、政治参加に関するプロジェクトと並行して、国際音楽祭の改善や多文化共生の促進に取り組む予定です。これらを通して、日本人だけでなく、様々なバックグラウンドを持った若者たちがコラボレーションすることにより、松本を世界中の人たちに愛されるような場所にしたいと思っています。

最後に、藤岡ゼミの第一弾プロジェクトを率いた学生のブログを紹介します。ここに、若者たちの社会に対する思いが凝縮されているので、是非一読していただくと嬉しいです。

ほんの少しだけ、生きやすい世の中を — 請願・陳情提出について —

執筆者プロフィール

藤岡浩志（ふじおか・ひろし）

エドゥケーター（数学教育、社会貢献教育、非営利組織論）。1978 年、長野県安曇野市生まれ。東北大学教育学部メディアデザイン専攻卒業。東北大学軽音楽サークル有志のメンバーとして、伊達ロックフェスティバルを創設。2005 年、松本ミュージックフェスティバル（MMF）のプロデュースに参加。2008 年から 2011 年まで、MMF 実行委員会実行委員長兼プロデューサーを務める。2015 年、安曇野国際音楽フェスティバル実行委員会副実行委員長兼 PR マネージャーに就任。認定 NPO 法人フローレンス（病児保育、小規模保育、障害児保育、赤ちゃん縁組、働き方革命）及び日本ファンドレイジング協会（寄付と社会的投資により非営利セクターの活動を促進）に寄付会員兼社会貢献教育推進メンバーとして参加中。藤岡ゼミ（リサーチグループ）を主宰。学生たちと共に社会課題の解決に取り組んでいる。

ウェブサイト <http://hizart.com>

※本稿についてのデータ及び肩書等は執筆時の 2020 年 4 月 1 日現在のものです。

※表現及び言い回し等は執筆者の原稿を活かした形で掲載しています。